

かとくり通信 第20号

発行日：平成31年1月1日 発行人：かとうファミリークリニック

インフルエンザが流行のきざしです



あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひいたします。

12月31日の大晦日、院長は休日診療所の当番でしたが、発熱の患者さんが多数来院され、インフルエンザ迅速検査陽性の方もたくさんおられました。冬休みなので学校や園での広がりはまだ少なそうですが、お正月休み明けの感染拡大は心配です。予防策を十分にしましょう。

さて、2000年代の約20年間でインフルエンザを取りまく診療環境も大きく変化してきました。新薬の登場や迅速検査の普及(一部に過剰なインフルエンザ・アレルギーともいいうべき状況?)など、今あらためてインフルエンザ診療を考え直す時期に来ているのかもしれません。とはいえて稀ではありますが、ワクチン接種をしている健康な成人であっても、脳炎を発症した症例も報告されていますので、病状変化には注意が必要な病気であることには変わりありません(重症化するかしないかはウイルスと個人の相性(組織親和性)が関連?)。

予防や診断・治療について理想論を言えば時間も紙面も足りないですが、実際「しんどい」患者さんは来ていますので、街場の医者である私たちにできることは、患者さんにとって適切な診断と治療を「個別に考えて」患者さん(とご家族)と決めることだと思っています。

その中でまず心がけていることは、迅速検査の感度をなるべく下げないこと。検体(鼻水)中のウイルス量が十分でないと検査は陽性に出ませんので「しっかりと鼻水を採る」ことが重要です。しんどい中の検査は、大人でもイヤなものですが、しっかりと採って結果に反映させることが大切ですのでご協力よろしくお願ひいたします。

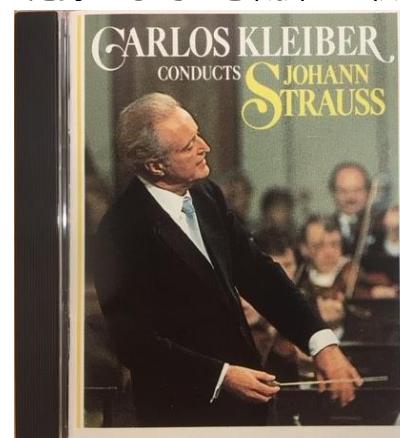
などなど、お鼻グリグリをしながらとりとめもなく考える年末年始でした。

院長の待合室 音楽セレクション

新年幕明けの1枚は、ちょうど30年前の1989年1月1日(1月7日までは昭和64年)に伝説の名指揮者カルロス・クライバーがウィーンフィルのニューイヤーコンサートに初めて登場した時のライブ録音です。

ワインナワルツは他のオーケストラ曲に比べると、曲自体の深みや展開の面白さに欠けると思っていましたが、クライバーの手にかかるれば別世界。「こうもり」序曲での極めて自然なテンポの緩急や最後の追い込み、「青きドナウ」冒頭の張りつめた緊張感、小品でのくつろいだ雰囲気など、変幻自在に自然で自発的なアンサンブルを引き出し、魅力的な音楽に仕上がっており「う~ん、さすが」とため息が出ます。

この録音はジャパンマナーが世界を席巻していた80年代、前年にアメリカのCBSレコードを買収したソニーが、破格の条件で権利を競り落としたと言われています。当時の高揚した空気感そのままのこのCDは、クライバーとウィーンフィルの貴重な遺産であるだけでなく、町工場のラジオ屋からCD(ハード)を成功させ、さらに音楽・映像ソフトまでを手中にしたソニーの一時代の頂点の記録としても感慨深い1枚です。



SONY CLASSICAL SK45938